

# 『中日大辞典』第三版の編集を終えて

愛知大学『中日大辞典』第三版の完成を間近にひかえ、編集所の主要編集スタッフが集まり第三版編集の苦労話や理想とする中国語辞書について、さらには紙辞書か電子辞書かといった辞書の将来をその豊富な経験に基づき、時には裏話などを交えて大いに語り合う。

今泉潤太郎

愛知大学中日大辞典  
典編集所編集主幹

×

顧明耀

同編集所  
編集委員

×

吉川剛

同編集所  
編集委員

×

司会 安部悟

同編集所  
所長

安部 待望の『中日大辞典』第三版がよいよ年内完成の運びとなりました。私は、今泉先生の後を継ぐ形で二〇〇三年から中日大辞典編集所の所長となり、力不足は承知の上でしたが、第三版を何と少しでも出版したいという一念でここまで来ました。そして今やつと年内完成の目途がつき、これまで第三版出版のためにご尽力いただいた多くの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

本日は、編集作業を終え、現在はその校正作業に追われている先生方に、お忙

しいなかお集まりいただきました。実は今回、『中日大辞典』第三版の完成を目前にし、『中国21』で辞書特集を組むことになり、その編集を任せられたものからです。本日は私が司会を務めさせていただきました。先生方には、『中日大辞典』に関することもそうなのですが、さらにそれを押し広げ中国語辞典の現状と将来といったようなテーマでお話しいただければと思います。所長の立場から言いますと、『中日大辞典』のことをできるだけお話しただき、これを大いに宣伝し

たいところですが、そういうわけにもいきませんのでよろしくお願います(笑)。

ではまず、当初からこの辞典の編集に携わってこられた今泉先生に、『中日大辞典』の歴史を簡単に振り返っていただきたいと思います。

## ■華日辞典編集処の設立

今泉 『中日大辞典』は一九六八年二月に初版が出版されるのですが、その編集



.....今泉潤太郎 [Imaizumi Juntaro]

が本格化したのは、一九五五年四月に愛知大学に華日辞典編纂処が組織されてからで、出版までに十年以上かかっています。編纂委員長は鈴木沢郎先生で、私はちょうどその三月に愛知大学を卒業したものですから、そのまま専任スタッフの一人として参加することになりました。私の最初の仕事は、中国から返還された一四万枚のカードを整理することでした。これは華日辞典カードと呼ばれるもので、愛知大学の前身である東亜同文書院時代に作成が開始されました。鈴木先生によると一九三三年に華日辞典の編纂

が發起されたそうですが、その頃から日本の敗戦までカード作成は継続され、敗戦と同時に当時の中華民国政府に接収されてしまいます。その後、東亜同文書院関係者により一九四六年に愛知大学が創立されるわけですが、東亜同文書院大学（編者注「東亜同文書院は一九三九年から大学となった」）の学長であった本間喜一先生が愛知大学での華日辞典の完成を強く望まれ、中国側にカードの返還を申し出ることを鈴木先生に相談します。鈴木先生は、カードが接収される時、接収委員であった鄭振鐸先生、この方は皆さんもご存じのように著名な文学史家で、後に教育部の副大臣になられた方ですが、その鄭先生に口頭で、将来我々の手では非華日辞典を完成させたいと伝えたことを思い出し、鄭先生にカードの返還を申し出ることになったわけです。ただ、当時は日中間の国交がまだ回復されておらず、日本中国友好協会を通じて中国側にお願いをしました。この時の協会の理事長が内山完造氏で、内山氏はともと上海に書店を出しておられ、魯迅とも

交友があった方ですが、実は東亜同文書院とも関係が深く、例えば、東亜同文書院に華語研究会というのがあって、そこが出していた『華語月刊』なども内山書店を通して日本に送っていたようですし、先生方や書院生もよくそこで本を注文したりしていたそうです。鈴木先生が魯迅に記念講演をお願いしたのも、内山書店でたまたま会われたことだそうで、同文書院そのものが内山書店をひきにしていたといえるかもしれません。また、本間先生は友好協会設立の際の発起人の一人でもあり、それでそういう話になったんだと思います。安部 個人的には、そのあたりのお話をもっと詳しくお聞きしたいところですが、そうもいきませんので、内山氏と魯迅、さらには同文書院との関係については、または非他の機会にお伺いしたいと思います。とりあえず話を辞典の話に戻していただいて、カード返還の要請を日本中国友好協会を通じて行つたわけですが、現在編纂所には本間先生がお書きになられた返還願いの文書の原本と、内山

氏の書かれた文書のコピーが保管されていて、その送付先が当時中国社会科学学院院长をしておられた日本でも有名な郭沫若先生となっております。

今泉 そうです。内山氏の文書はこちらで準備した下書きのコピーで、残念ながら内山氏の書かれた原本ではありません。後に日本中国友好協会にお願いをして探していただいたのですが、よくわからないとのことでした。先ほどお話しした鈴木先生が鄭振鐸先生宛に出された手紙の原稿もあると思います。こうした多くの方々のご尽力があつて、「本来なら返還できないが、日中友好の見地に立つて日本人民に贈呈する」という形で、一九五四年にカードが返還されたわけです。

返還後、日本中国友好協会主催の会議が開かれ、最終的にこれを愛知大学にゆだねるということになりました。返還の翌年、学内に編纂委員会が組織され、華日辞典編纂処が設立されることになりました。返還された一四万枚のカードのうち、語彙が古くなったものや使えないもの

のが結構あつて、すべてを活用したというわけではありません。編纂委員会で、最初に編集方針や執筆基準などを決めなければならぬわけです。これは確か二年ぐらいかけて徐々に決めていったと思うのですが、日本の国語辞典のような辞典を作りたいというのは最初からあつて、さらに時代も大きく変化していったから、カードの語彙に限らずできるだけ幅広くオールラウンドに集めようという方針ができたように思います。こうして編集作業が始まりますが、当初は五、六年、長くても一〇年ぐらいで完成すると考えていました。しかし実際には基礎的な作業だけで一〇年かかりました。その原因は二つあつて、一つはスタッフ数と勤務時間にかなり制約があつたこと。もう一つは、中国における學術研究の成果をできるだけ反映させようと考へていたことです。よく考えれば、これはきりが無い。次から次に出てきますから（笑）。

結果的には当初の予想よりもはるかに長い一三年もかかってしまいました。こ

れは見通しが甘かったこともありましたが、本来辞書編集という仕事そのものがやり始めるときりが無いということもあると思います。このような点から言えば、辞書の刊行には、編集側のチェックと同時に出版側というか経営側のチェックがどうしても必要ですね。我々は、できるだけ新しい情報を正確に伝えたいという思いが強いので、時に刊行スケジュールを無視したりしますから。

安部 その点は私も今回実感しました。よりいいものを出したいと思う気持ちと、刊行スケジュールとの板ばさみになり、かなり苦しい思いをしました。先生方にもかなり無理をお願いして申しわけなく思っております。結局どこかで、エイヤツと出さなければなりませんからね。ただこの問題は、一度出したものに随時改訂が加えられるようになれば、かなりの部分解決できるのかもしれない。この点はまた後ほどお話ししたくことにして、初版出版後のことをお聞かせください。

## 『中日大辞典』の刊行

今泉 こうして初版が刊行されたわけですが、苦勞した甲斐あって、世間から非常に歓迎されたのは確かです。中日新聞社から中日文化賞もいただきました。ところがその後、辞典編纂処は一旦解散します。何とか刊行でき、またそれが好評だったために、少しほっとしたのかもありません。やはり辞書編集は大変な苦勞で、鈴木先生もその後大病にかかったりしましたから。ところが、一九六六年に始まった文化大革命によって、新しい語彙がどんどん出てくるようになり、我々も対応を迫られることとなります。これは予想外でした。その後、訪中の機会があり、これが契機となって辞典編纂処が再開されます。ここから増訂版の編纂が始まるのですが、これも結局、初版同様一〇年以上かかって、一九八六年の出版となりました。この間に文化大革命が終わり、改革開放で市場経済が導入されるなど中国の体制も大きく変わり、それに

よって語彙も当然変わりますよね。今から考えると、増訂版をどうしても出す必要があったわけですね。ところが編集スタッフは二人だけで、鈴木先生が体調を壊されたので編集主任となり、私が編集委員長となりました。その後新しく何人かの先生にも加わっていただきましたね。また、一九八二年には鈴木先生が急逝され、その影響も大きかったと思います。

安部 増訂版が出されたあと、翌年には増訂第二版が出されますね。増訂版で簡化字総表を全面的に取り入れたところ、翌年簡化字が追加されたり、発音が訂正されたりしたため、これに対応したと伺っております。私は増訂第二版が出版された翌年に愛知大学に赴任し、その後編集委員となったものですから、その間の事情はよく知りませんでした。増訂第二版の評判はいかがでしたか。

今泉 これも非常によかったですね。新しい語彙もかなり入れましたし、全体の語彙数も相当多くなっています。ただ、

古い語彙を削ったために、そういうところをやっておられる方からは不満も出ました。

安部 これは非常に難しい問題で、紙幅が限られているわけですから、新しいものを入れるためには古いものを削らなくては行けない。我々にとつては最も悩ましい問題の一つだと思います。今回の第三版でも同様の問題がありましたので、この点については、後ほど改めて取り上げたいと思います。

今泉 増訂第二版も初版同様よく売れたのですが、出版から一〇年以上経つとやはりこれも時代のニーズに対応できなくなってきました。改訂のための基礎作業は続けていたのですが、本格的に第三版の編纂が始まるのは、二〇〇二年に編纂所が現代中国学部のある名古屋校舎に移転してからです。

安部 その時、私が所長兼編集委員長となり、今泉先生には編集主幹として引き続き編纂をお願いしました。同時に、現代中国学部の先生方にも編集委員や編集協力委員になっていただいたのですが、



吉川 剛[Yoshikawa Tsuyoshi].....

この時に今日ご出席の吉川先生にも編集委員をお願いしました。吉川先生はコンピュータに詳しく、増訂第二版を電子辞書化する時にいろいろとお願ひしました。

吉川 愛知大学に赴任したばかりで、事情もよくわからないうちに編集委員になつていたという感じですが。私自身も『中日大辞典』にはお世話になつていたので、とても光栄に思いました。電子辞書化のときは、やはり初めての試みという事でいろいろと大変でした。今泉先生、安部先生の英断ですが、待望のと

いった感じで、好評だったのではないのでしょうか。辞典編纂の大変さ、諸先生方のご苦勞を垣間見た気がしました。『中日大辞典』収録の電子辞書は、上級機種としてラインアップされていて、上級者向けとかエキスパート向けといった展開がされているようです。この点は、メーカーも市場を意識しているというか、この辞書の利用者、辞書の性格をつかんでいるなという気がしますね。

安部 二〇〇四年には、編集業務をさらに強化するため、顧明耀先生に来ていただきました。顧先生は、すでに日中辞典を何冊も出しておられ、その豊富な経験を今回も大いに發揮していただきました。途中参加ということで、戸惑われることも多かったと思いますが、五年間という限られた時間の中、本当にお世話になりました。本来ならこの三月末で退官され、帰国される予定だったのですが、帰国を半年延ばしていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。顧先生はこちらに来られる前に、『中日大辞典』にどのような印象をお持ちでしたか。

顧 実は、『中日大辞典』の初版が発行されたのが一九六八年ですが、たぶんその直後に入手してずっと使ってきました。私にとつては最も大きな中日辞典、そういうイメージです。私はこの二、三〇年来ずっと辞書のことに関わってきました、ある大学で一度辞書についての講演をしましたし、また「辞書の間違い」という論文も出しました。これに対して、私の昔の教え子で、今ではある大学の教授をしている人が私に言いました。「先生、もし辞書の間違いということだったら、小さな辞書ではだめですよ。愛知大学の『中日大辞典』でないと論文にならない」と言われたんです。愛知大学の『中日大辞典』が読者の心の中でどれほど重いものかこれでわかるだろうと思います。五年前、私が広島女子大学を定年になった時、ちょうどこういう仕事がありました。第三版の編纂に携わらせていただけたことは、私にとつては非常に光栄なことだと思います。他の辞書もいろいろやってきましたが、五年間連続して、他のことはほとんどやらぬ編集



..... 顧 明耀 [Gu Mingyao]

に専念したのはこれが初めてです。

安部 顧先生に来ていただき、第三版の編集体制が整ったところで、二〇〇六年に愛知大学は創立六十周年を迎え、その記念事業の一つとして第三版の出版が正式に認められるのですが、初版の編纂が創立十周年の記念事業として認められたことを思うと、何か不思議な巡り合わせを感じます。実際の完成は二〇〇九年になってしまったわけですが、これからはお二人にも加わっていただいて、第三版についてお話しいただきたいと思いま

### ■第三版の特長

安部 ではまず、第三版の特長といいますが、主な改訂点についてお話しください。

今泉 第三版も編集の基本は変わりません。ただ従来と違って一番大きく変わったのは、それぞれの分項というか、項目を分けたことです。複数の発音があるものはそれぞれの箇所に見出し字それから見出し語をおいたということですね。編集の内容からいうとこれが最大の変化ということになります。

顧 今、今泉先生がおっしゃったように第三版は分項したんですが、やはり分けた方が便利だと思います。以前だと、調べる時にそこになければもう一回調べなければならぬ。今回は一発で調べることがができる。これは第三版の大きな変更点ですが、非常にいいことだと思います。安部 分項でより使いやすくなったわけですね。それ以外の点で言いますと、新版になると、大体どの辞書もそうだと思

いますし、増訂版の時もそうだったわけですが、語彙に大きな変化があると思うんです。特に中国のこの二〇年間の変化は非常に大きかったと思うので、そういう部分で苦労された点とか、新語をどのように取り入れたのかといった点を少しお話しいただけますでしょうか。

今泉 語彙は、これはもう時代に伴って変わるものですから。第三版では特に、『現代漢語詞典』、『応用漢語詞典』、『現代漢語規範詞典』という中国で出されている辞典が依拠すべき文献となりました。それから編集、特に辞書作成の面で言えば、中国では用語や記号の統一などいろいろと規制をかけておりますが、『中日大辞典』は日本で出す辞典ですから、そういう規制に細かなところまで一致させておりません。我々の独自基準で編集をしたわけです。新語については、拠るべきものをどこにするかということで議論がありました。先ほど言った三種の辞典がいずれも比較的新しいものでしたので、これらの中にも含まれていれば、当然『中日大辞典』にも入れる必要

があります。それ以外にも各種各様の新語辞典というのが出ておまして、どれをとるかはその問題で、結局、比較的信頼できるもの一冊を参考のメインに置きました。

顧 新語については三種類あります。一つは比較的定着したもので、これはほとんど取り入れました。次は他の辞典にはないような本当に新しい語彙ですが、第三版にはある程度入っています。もう一つは、その意味が定着するかどうかまだわからないような新語です。もしかしたら三年、あるいは五年たつたら意味が変わるかもしれませんし、二、三年経つたら死語になるかもしれません。我々は新語を採用するとき、インターネットでチェックしていますが、新しい語彙ですから市民権を持っているかどうかわかりにくい。そういう新語もあります。

安部 新語の扱いはなかなか難しいです。からね。大まかな数字で結構ですので、今回だいたいどれぐらい新しい語彙が増えたのでしょうか。

今泉 まだ精査しておりませんが、三分

の一は替わつただらうと思います。新語というわけではないんですけど、出典が明らかでないものを思いついてカットしましたので、それらを削つた分は何らかの形で新しい語彙が入っております。ですから、ここ十年ぐらいの間に新しく出た、または新しい意味を付与されたという新語は三分の一もないかもしれません。従来の初版や第二版に載っていなかったというのまで入れますと、三分の一は替わつたんじゃないかと思えます。大雑把にいいますと、全部で十数万語ですから五、六万語は入つたであろうと。それからもう一つ。我々スタッフ以外に愛知大学の同窓生の方が、それこそ献身的にとりつか、ボランティアで多数の新語を集めて送つていただきました。

新語の一部にはこれらも入っています。

安部 それ以外に何か特長はありますか。しようか。

顧 他の辞書、特に中型以上の辞書はたいてい複数の方が分担してやります。主編者がすべてに目を通して加筆訂正して

いる場合があるかもしれませんが、ほとんどがそうでないと私は思います。私は日中辞典を多く手がけてきましたが、こういう研究を少しやつたことがあります。例えば月曜日から日曜日までを全部辞書で調べてみたら、ほとんどの辞書はその説明がばらばらです。「日曜」だけ、あるいは月曜の時は「月曜日」、火曜日には「火」のところで説明する。統一されていない。なぜかという分担するからです。日本語の「こ・そ・あ・ど」

も私は調べてみました。そういうものも説明が統一された辞典はほとんどないです。例えば、「こんな」、「こんなに」。これを一つの単語にするか、二つの単語にするか、それぞれ違う。「あんな」、「あんなに」は一緒。しかし「こんな」の場合、「こんな」はあるが「こんなに」はない。「そ」の場合は、「そんなに」はあるが、「そんな」がない。この点、今回の第三版は、最初から最後まで主幹の今泉先生が何十年もかけて目を通し、加筆訂正してこられました。その点から言いますと、他の辞書と違ってバランスをとりやすい。一人でも長年やれば最初の頃

と後の方では少し違うところがあるかもしれないが、でも大勢で分担してやるよりはいいと思います。これは『中日大辞典』が他の辞書と全然違うところだと思えます。

安部 ありがとうございます。第三版は、百科事典的な性格など基本的な編集方針は変わらないものの、形式の上でも、また内容面でもかなり大幅な改訂が加えられていること、さらには全体を通して編集主幹の今泉先生のお考えが反映されているということですね。

顧 もう一つ。これは第三版の特長というより、『中日大辞典』の特長といった方がいいかもしれません。『中日大辞典』以外にも中日辞典は何冊もあります。ただその目指しているところは日本人でも中国人でも使えるということだと思います。実は日本人の立場で見た中日辞典と中国人の立場で見た中日辞典は違うと思います。中国人が中日辞典を調べるとき、中国語の意味はわかっていません。ただ、どういうふうに日本語で表現するか、そのために調べることが多い

のではないかと思います。しかし日本人の場合は、その中国語がどういう意味か、あるいはどういうニュアンスを持っているか、そういうことに重点があるのではないかと思います。ですから同じ中日辞典が、中国人にとっても最適、日本人にとっても最適というものは、まずあり得ないと思います。いま市販されている辞書は、中国人も使えますし日本人も使えますが、結果的にはどちらにもちょっと足りない部分があるのではないかと思います。私がこの数年間こちらでお手伝いさせていただいて痛感したのは、『中日大辞典』は日本人のための辞典だということです。これは中国人のためのものではない。もちろん中国人が使っても結構プラスになりますけれど、でも出発点は日本人のためというのが私の感想です。中国人だったら見ればわかるけど、日本人だったらわからない、そういう語彙も入っています。中国人のための中日辞典とはちょっと違うというのが私の感想です。

## ■中国語辞典の現状と今後

安部 これまでは『中日大辞典』のこのことを中心に話していただきました。次にもう少し広く中国語辞典の現状と今後についてお話しさせていただきたいと思います。今、顧先生が指摘されたように、日本人が使う中日辞典と中国人が使う中日辞典は異なるべきなのに、多くの辞書が両方を追い求めた結果、中途半端になっているという現状があるとすれば、今後中国語辞典がよりいいものになつていくためにはどのようにすればよろしいでしょうか。この点について、今泉先生、何かお考えがあればお聞かせください。

今泉 ここ二〇年ぐらい、主として日本で言いますと、顧先生の指摘された点があるにしても、レベルの高い中国語辞典が一応出ました。まだドイツ語、フランス語のレベルには達していないかもしれませんが、何といたっても日本の中国語辞典は、辞書学的なレベルが低いところがありましたから、それを頑張つて一定の

レベルに急速に引き上げましたよね。と同時に、例えば文法的な機能に詳しいとか、用例が豊富であるとか、いろいろな特長を持った辞典も数は少ないにしても出ております。このことを踏まえていくと、次にどんな形で日本人のための中国語辞典というものが追求されるべきなのか、これは大きな問題点だろうと思えます。ただ、多様性、汎用性というよりも、どうもそれぞれの向き、専門性といましようか、そういったものを追求したもの、つまり個性的ということにもなりますけど、そういう辞書がいくつか出ることには大事なことだと思います。これは電子辞書のところでもたぶん問題になりますけど、例えば一つの単語を検索すると、五種類の辞書の意味が同時に見られるようになった場合、その次は違うものが必要かなあという感じはしないでもないですね。ただ、本国の中国における辞書のレベルがさらに上がることは確実ですので、例えばコーパスのようなコンピュータを使ったものが出てくると、今の問題に新しいヒントを与えてくれるか

もしれませんね。

安部 顧明耀先生は中国の辞書の状況にお詳しいと思いますが、そのことを踏まえて先生はどのようにお考えでしょうか。

顧 今泉先生がおっしゃったことに私も同感です。要するに辞書は、私の考えでは、誰のための辞書かということが大切だと思います。先ほど申し上げましたが、『中日大辞典』は明らかに日本人のための辞書です。その上で、日本人の何のための辞書かということもちょっと考えなければならぬ。私の考えでは、『中日大辞典』は日本人のための辞書ですが、さらに、読むための辞書だと思えます。辞書には、読むためのものつまり読解用と、書くためのものつまり表現用のものがあると思います。『中日大辞典』は表現用ではありません。今出されている多くの辞書は、その両方を狙っていて、結果として中途半端な気がします。もし語彙量が一万程度の小型辞典で、完全に学習者向けののであれば、両方ねらうことは可能でしょう。しか

し、読解用としては語彙量が少なすぎます。語彙量が増えると作文のための情報が入らなくなってしまう。ですから目的によつて編纂することがたぶん必要ではないかと思えます。

吉川 確かに今の紙辞書には量的な制約があるので、両方を狙うことは難しいかもしれませんが、電子辞書になるとその制約が薄れるので、可能になっていくかもしれないですね。ただ、そうする必要があるかどうかは別の問題ですが。

顧 電子辞書については私なりの考えがあります。電子辞書は調べやすいし、持ち運びが便利なので、多くの人に愛用されていますが、私は実際あまり使っていません。なぜかといいますと、一つの単語を調べる時に、その周辺の情報が見えにくいという問題があります。辞書は引くものですが、読むものでもあるんです。ですから私は、学生には紙辞書を薦めています。

安部 確かに、現状では紙辞書にも電子辞書にも一長一短がありますね。ただ、電子辞書の普及率を考えると、辞書の編

集者としても対応を考えなければなりません。

顧 話を戻しますが、もう一つ例文の問題があります。例文の中にはかなり古いものもあれば、新しいものもあります。これが読者にはわかりにくい。もしその辞書を使って作文する場合、場合によっては自分の書いた文章の中に、古い表現と新しい表現が同時に出てきてしまう。でも、読解用であれば問題ありません。ですから先ほど今泉先生がおっしゃったように、辞典はやはりいろいろな必要に応じて使い分ける。我々も読解のためか、表現のためか、それぞれの用途に合わせて個性のある辞典を作らなければならぬと思います。

今泉 今、顧先生の指摘された『中日大辞典』は読解用の辞典であるという点はおっしゃるとおりで、初版以来の特長で、鈴木先生のお考えもそうだったと思います。特に私なんかは中国語を耳からあるいは口からというよりもやはり文字を通して覚えましてから。一般的に日本人は二千年来、文字を通して、つまり漢

字を通して中国語を知るのが基本で来ました。我々が中国語を教える場合、ドイツ語やフランス語と比べて何が決定的に違うかという点です。日本語の中に漢語が入っている。このこと

から日本語が逃れられないという、これがやはり非常に大きな影響を与えていると思います。読解を中心とするというのはつまり二千年来の歴史なんです、簡単にいうと。そうしますと例えば、時系列でいうとこの語がこういう異なる形をとっているというのを、つまり異形字ですね、これをずらつと並べたほうが、日本人にとっては、少なくとも文字から中国語を知るという場合は、ごく常識的に必要だろうと思います。ただこれは、人によってはばかばかしいことで、今使われているものを残し、その他は排除すべきだということになるかもしれません。

顧 私はばかばかしいとは思いませんし、読解用であれば当然必要だと思えます。私も先生と同感で、日本人のための中日辞典は、他の外国人のための中日辞典、あるいは中国人のための中日辞典と

まったく同じであつてはいけないと思います。

#### ■品詞分類について

安部 最近では、先ほど今泉先生もおっしゃられたように、様々な出版社から質の高い辞書がたくさん出ています。そこにはいろんな工夫が凝らされており、以前はなかつた図版や写真が入ったり、印刷にしてもカラー印刷などを使って見やすく工夫されています。また、『中日大辞典』にはないものとして、品詞分類が多くの辞書で付されるようになっております。この品詞分類はなかなか厄介な問題があるのですが、例えばその点について今泉先生はどのようにお考えなのでしょうか。

今泉 品詞の問題も先ほどの話と若干絡んでいると思います。つまりこれは中国の方も認めておりますけど、例えば先ほどの三種の権威ある辞典が、同じように決めている時はいいんですけど、そうでない場合が当然出てきます。同じ形容

詞でも、日本語の場合、形容詞と形容動詞はどう違うかという問題が出てきます。文法論でいうと、今度はその形容詞が本当に形容詞かというようなことも出てきます。そういう問題点がどうしてもありますから、『中日大辞典』はそのことに完全に背を向けました。積極的に背を向けたというか、採用しないという方針で来ました。しかしこれも、品詞分類を含めて語の認定の基準を厳密にすれば、例えば「兼詞」ですが、二つ以上になつてくるものを排除して形容詞と名詞という二つの品詞のみにしたり、中樞となる、これだけは絶対に譲れないというものだけを選んで編集するということも可能かも知れません。こうすると中国

で出ている辞典と基本的に一致するかも知りません。だけど私は、これはもう個人の考えが大きく影響してきますけれど、品詞分類とその読解が、漢字が日本に与えた影響といいますが、日本語の中にある漢字との違いといいたいまいしょうか、その共通性と非共通性といいたいまいしょうか、そういう問題から逃れられないとい

うことが強く働いています。この点については批判があるところで、第三版もその点では当然その批判は甘受すべきであらうと思います。

安部 品詞分類は、批判を覚悟の上で、意図的にそれを排除しているということですね。

今泉 そうです。それから先ほど顧先生がおっしゃった点ですが、「A」から「Z」までを全部一人で見る場合にはブラスの面とマイナスの面があつて、私自身は非常に自分の力不足を痛感しています。これまで多くの方々の協力があつてこうしてやってくるのができたわけですが、果たして、神様以外の限界のあるものが、一人で割り振つてしまつていいのか、自己の判断だけでやるのはどうかかと、そこまで考えていきますと自己矛盾です。かといって、五人が五分のずつ分担しても、どこかで統一しなければいけないということになります。そうすると、例えばある辞典がそういう作業をしていきますが、いわゆる見出し語と見出し字の部分で分担するというのも一つの

手だと思えます。ただ、これにもいろいろと批判があり、それは免れない。ですから、これからの辞典は、可能性としては今言つたようなことがそれぞれのところで追及されるべきだろうと思います。それから、辞典の編集と出版は別のものですよね。出版するには当然お金がかかります。それを考えると、私も顧先生もそうだと思いますけど、作る側から言えば一つの夢にしか過ぎないんです。こうあればいいなあということだけで、それが実際に辞典の形をとるには非常に困難が大きいというか、実現性が少ないということになります。

顧 確かに出版するというのは大変ですから。

先生が先ほどおっしゃつた品詞のことについて、ちょっと私の考えを申し上げたいと思います。最近の中国語の辞書にはほとんど品詞分類がついています。今泉先生がおっしゃつたように、辞書によつて品詞が違う場合があります。面白いのは、同じ辞書でも、例えばある語彙を最初は名詞としていっているのに、あとで接

辞として名詞ではないという。『現代漢語詞典』にもありました。品詞分類は確かに難しいことですけれども、しかしやはりこれは何のための辞書かということを前提にして考えなければならぬと思います。『中日大辞典』は読解のため、閲読だけのための辞書だと考えれば、品詞はそんなに強調しなくても差し支えないかもしれません。もし中国語で何かを表現するのであれば、やはり品詞が必要だと思えます。『中日大辞典』の場合でも、文法について詳しいところは非常に詳しいです。例えば方向補語の使い方とかあるいは数量詞の数え方とか、場合によつては普通の文法書ぐらいい詳しく説明しています。その点から見れば、それは学習者のためです。しかしもう一方で、基本的な品詞分類のことには触れていない。触れていないというのは、ただはつきりと書いていないだけだと私は理解しています。その語釈、説明の方法から見れば、品詞のことを考えているのは明らかです。私は読解用としてはこれでいいのかなと思います。ただ表現用だとそう

はいきません。同じ意味をもつ言葉はいくつかありますが、一〇〇%同じことはまずない。意味の幅が違う、他の語との結びつきが違う、品詞が違う、ニュアンスが違う、マイナスイメージかプラスイメージかが違うなどいろいろあります。もし表現のための辞書だったら、そういうことをはつきり示さないと読者にはわかりません。『中日大辞典』はやはり読解用ですから、読者にはまずこういうことを念頭において使つてほしいです。どんな場合でも同じように使えるというわけではまったくないのです。

### ■コーパスの活用と電子化

安部 おそらく使つておられる多くの方も、その点はある程度理解していらつしやるのではないかと思えます。実際にこの『中日大辞典』を使つていらつしやる方を見えますと、例えば初めて中国語を勉強するという方よりも、ビジネスで実際に中国語を使われている方ですとか、あるいは中国研究者、それから学生

でいますと、専門課程に進んでちよつと難しい論文ですとか小説を読むときに利用しているようです。それから先ほどの話になりますが、この辞書の大きな特長は百科事典的な性質です。できるだけ多くの語彙を入れようというコンセプトで作られています。要するに他の辞書で引いて出てこない語彙が『中日大辞典』では出てくるといふのが大きな特長になっていきますし、実際私も学生時代からその恩恵を被つた者の一人です。確かに、顧先生が今おっしゃつたような細かな点について、すべての方に本当に理解していただけているかどうかとなります、断定はできませんが。また文章を書くとなると、全然違つた意味を持つてくると思えます。例えば、語の軟らかさ、硬さみたいなものも実際に使うときには本当に重要で、ある語彙がどのようなシチュエーションで使われるかを知る必要がある。これは有名な話ですが、国交回復の交渉時に、「中国国民に多大な迷惑をおかけした」という部分を、通訳者が「添了很多麻煩」と訳して問題になつ



安部 悟 [Abe Satoru] .....

た。辞書には「面倒をかける」「添麻煩」という形で必ず出てくるわけですが、実はそれがどのようなシチュエーションで使われるのかということも、大切になってきます。それをどこまで辞書が網羅できるかというと、やはり大きな問題が残ると思うのですが、表現用ということであれば、そういうことも考えていかなければいけないでしょう。実際に岩波書店の中国語辞典はこの点に配慮しています。ですから、それぞれの辞書がそれぞれの特色を持つことと、使う側がその特色を理解した上で使うことがと

ても重要になってくると思います。またシチュエーションということを考えるなら、先ほど今泉先生も触れられたようにコーパスの活用ということも出てくると思います。この点について、吉川先生はどのようにお考えですか。

吉川 英語辞典ではすでにコーパスの活用が進んでいて、その利便性は多くの人々が実感していると思います。中国語辞典でも今後その活用法が問題になってくると思いますが、まずは常用語とか基本的な語彙に、コーパスによる成果などを取り入れるのもおもしろそうですね。あと、中国でも大型のコーパスが整備されてきているようです。またコーパスを利用するソフトとしては、語の頻度や共起を検索するといったコンコーダンスソフトウェアなどがあります。やはり、英語が主だった気もしますが、オンラインも含め、個人ユース、研究ユースでも使えるソフトウェアも出てきています。有償、無償のソフトがあるので、興味がある方は、無償というか、フリーウェアを利用してみるのもよいと思います。コー

パス言語学の裾野が広がっているなという気がしています。

安部 今後、中国語辞典についても、コーパスの活用というのは大きな課題のひとつになってくると思います。では、電子辞書についてはどうでしょうか。

吉川 国内では、確か二〇〇四年だったかな、出荷台数が二〇〇万台ベースを越えてから、火がついたみたいですよ。各社、入門から上級まで、搭載する辞書や機能に応じて製品構成を工夫しているようです。最近、あまりチェックしていないのですが、日本メーカーの中国向け製品もおもしろいようです。

安部 ジワリというより、あれよあれよで普及した感じがありますね。愛知大学の場合、二年生で中国に語学研修に行くので、そのことを考えて電子辞書を買う学生もけっこういるようです。持ち運びに便利ですから。

吉川 ええ、そうですね。先ほど今泉先生が触れられていたように、複数の辞書を串刺し検索できるモデルもあって、便利になりました。あとは手書き認識です

ね。学生を見てみると、画数で引かずに、文字認識機能、それと音声機能も使っているようです。私も学生時代は、中国書を読むときには、『中日大辞典』もそうですが、『現代漢語詞典』などの中国の辞書も机の上に何冊も並べて、さらには初版とか前の版も引いて、これはどういう意味だろうと考えていました。入門段階の時は薄い辞書から始めて、様々な辞書をそれこそ引き倒したといいますか、それぞれの特色を味わってきたというところがあります。今ではそれが、電子辞書ひとつでできてしまうわけですから、本当に便利な時代になってきましたね。あの頃の苦労が懐かしい気がします。個人的な要望なのですが、『中日大辞典』のこれまでの各版が串刺し検索できるといいかなと思います。もしもですが、辞書に入れるのを断念した、あるいはカットした語彙まで検索できると、とてもおもしろいですね。

かと、個人的には思っています。吉川 顧先生が、先ほど挙げられていた一覧性についてですが、電子辞書は画面サイズが小さく、それは決していいことだとは言えないですよ。ただ今後、例えばA4サイズの電子ペーパーやタッチパネルといった、新たなデバイスの動向によつては、現在の製品とは違った電子辞書が出てくるかもしれません。私はジャンプ機能やら、あいまい検索で遊んだりもしています。顧先生にお伺いしたいことがあるのですが、例えば先生がお考えの究極の一冊、それも紙とか媒体の制限がない場合、理想的な辞書つていうのはどういう形が考えられるかということですか。

### ■理想的な辞書と『中日大辞典』

顧 それは非常に難しい質問ですね。私は日本に来る前、基本的には日本語教育をやってきました。国家教育委員会、教育部に頼まれて教材を作りました。教材を作ると同時に、教材のための文法書と辞書も作らなければならぬ。その時に作った辞書はまったくの学習用の辞書ですから規範でなければならぬ。こういうふうに使ってもいいし、こういうふうにも使えるといった表現は極力避け、このように使いますという表現になります。品詞とか意味も。そういう辞書を作りました。日本でも売っていますし、台湾でもすぐ出版されましたが、今考えるとその利用者層は非常に狭いです。これはあくまでも学生用の辞書ですし、理想の辞書というわけにはいきません。『中日大辞典』のことで言いますと、これから完璧にする余地もまだありますが、例えば表現用の『中日大辞典』も企画したらどうかと思えます。また、私は初版も第二版も使わせていただきましたが、私の感じとしては、文学、古典を読むなら初版の方が使いやすい。もちろん今から見れば間違いや不備なところがないわけではありませんが、でも貴重な部分もかなりあります。第二版にはプロレタリア文学の言葉が結構入っています。それらを、例えば今の中国の若い人に言っ

てもわからないものがたくさんあります。だから過去のある時代の語彙を集めた時代別辞典のようなものもあればいいと思います。今回の第三版はプロレタリア文学に出てくるような語彙は、一部を歴史的な単語として残しましたが、あとはカットしました。カットすることは第三版にとつては必要な作業でしたけれども、プロレタリア文学を研究する人にとつてはもつたないような感じがします。ですから辞典編纂所としても、もう少し高いレベルを目指して、『中日大辞典』をより完璧にすると同時に、表現用や時代別といった新しい辞典を作っていくば、愛知大学の中国語辞典は日本どこるか世界一になると思います。

今泉 例えば、自動車を考えたと、それぞれのメーカーが用途別に実には様々な車種を出していますよね。辞書と自動車を一緒にはできませんけど、それぞれの用途に向けた特長を持ったものが必要で、さらに基準を明確にして、後部ワイパーはこの車種にはあるけどこれにはないといったことが、ユーザーにもよくわかる

ようにする。自動車の場合は主としてお金儲けですけど、辞書の場合は、その基準というか、スタンダード作りと理論化に愛知大学が貢献できるのであれば、それは顧先生のおっしゃるように世界的な寄与になります。具体的にものを作ることは大変なことですけど、辞書学の理論化とスタンダード作りの方は、総力を結集すればひよつとすると可能かなと思います。皆さんもおっしゃっています、

古典をやる人は黒の初版を、プロレタリア文学をやる人はやっぱ赤の二版を、汎用向けは青の第三版ですよ、在庫ありますよ、といったふうにやればいいんですよ(笑)。それを、語の基準とか品詞分類も含めて、それぞれの辞書の特色をもう少し整然とした形に整理できれば、それは非常に大きな貢献になるかもわかりませんね。愛知大学はせっかくこれまで六〇年間も辞書編纂をやってきましたから、それなりに蓄積されたものがあるはずで、何か辞書学的な理論の構築といえます。それが必要なと思います。

吉川 その上で『中日大辞典』の体系化

といいますか、シリーズ化を行うということですね。

今泉 ええ。そういうものが出ればいいですね。

吉川 紙辞書で歴代築いてきたものがフラッグシップ、その系列に電子辞書もあって、これには時代的、技術的な制約もあるわけですが、つまりこれまでの辞書作りの蓄積が中心にあり、その特色が分化していく中で、『中日大辞典』スピリットとでもいうものが体系化できていくのかなということは、編集委員となり先生方に面倒を見ていただいている中で感じていましたし、そのスピリットが、この編纂所の一番の大きな役割である次の辞書を生み出すジェネレートというか、動力といえますか、そういうものじゃないかなと感じているところだったんです。安部先生、いかがですか。

安部 そうですね。私も編集委員となつて随分経ちますが、今回は所長として第三版の編集、出版にかかわって、『中日大辞典』に対する思いがかなり変わりました。今、吉川先生が言われたように、

これまでその編纂に尽力してこられた、今泉先生や顧先生、その他多くの方々の熱い思いを、辞書編纂の大変さとともに本当に肌で感じることができました。と同時に、そういうスピリットを決して絶やしてはいけないという、強い責任も感じています。先ほど顧先生がおっしゃられた、表現用あるいは時代別の『中日大辞典』の編集の問題や、今泉先生がおっしゃられた、用途別辞典の理論化とスタンダード作りの問題など、我々がやらなければならぬことはまだまだあります。さらには、電子化の問題や、これまでカットしてきた語彙や入りきらなかった語彙を加えたデータベースの構築なども考えていかなければなりません。これらの問題を、吉川先生を含めた新しいスタッフの協力をあおぎながら、すべて実現するのは難しいとしても、これまで同様、実現に向けて少しずつ努力していくことが大切だと思っています。『中日大辞典』の伝統の上に、辞書の将来を見据えた、新たな挑戦をしていきたいと思えます。

なお、本日今泉先生にお話しいただいた『中日大辞典』の歴史について、さらに詳しくお知りになりたい方は、『中国21』Vol.18に今泉先生のインタビュー記事がありますので、そちらをご覧くださいと思います。

先生方、本日はありがとうございます。

(二〇〇九年七月二一日)  
(テープ起こし) 宮田千信、  
文章整理 安部 悟

